

るがまゝに運んでゆくが、控える日なとも思はれるほどに慎重な論證のうちに幾多の新しい解明が輝かしく窺される。東埔塞に於る日本町をビニヤール、ブノンベンに考定された如きはその著しい一例であらう。だがそのやうなものは大なり小なりこの書の到るところに見出される。本書の刊行によつて我が國民による南洋發展史の研究は貴重な礎石の一つを置き得たといつてよい。

併しそれにしても著者が主題の範圍を嚴密に日本町そのものに限る、その背景たるべき各般の事情に對して故ら筆を控えて居られるやうに思はれるのは物足りない感じもする。殊に當時日本人の關係した諸事件に就いての證明が省かれてゐるのは、卒讀するもの、理解を困難にはしまい。同様に著者は先人の業績に對してもなるべくそれらと記述の重複する愚を避けやうと努めて居られるかに見える。併し、例へば東恩納氏によるアヌティヤ發掘の成果の如き、メナム川から引いた舟堀に面してかなり大きな日本人館の規模が明かにされたかと記憶するが、そのやうなものが資料として正しい批判の下に用ひられてあつたとしたら、讀者は寧ろ本書から一層の便益を受け得たに違ひない。といへこれは専ら「研究の前進」を意圖して居られる著者に對しては見當違ひの妄語であるかも知れぬ。

圖版はいづれも珍重すべきものだが、研究年報に掲げられたもの、うち數葉が省かれてゐるのは何故であらうか。殊に一六四四年のブノンベン前面の戰鬪圖を割愛したのは、それが考證の直接の資料でもあり、他に見得ないものであるだけに惜しまれる。

終に人名、件名の外、船名索引を附したのは親切であるが、地名に就ては今少し鄭重であるのが望ましい。

時局の展開と共に日本人の海外發展が云爲され、南洋がいたく我が國民の注意を惹きつゝある時、本書のやうな着實な研究が公にされたことは何よりも悦ばしい。著者はこの書の上梓を前にして三度南洋に旅し、最近更に豊かな收穫を得て歸朝されたと聞く切にその健筆を祈るものは敢て評者のみではあるまい。

なほ本書を刊行された南亞細亞文化研究所は目下各方面の資料を蒐集しつゝ、多數の學徒を動員して南方文化の研究を進めると共に逐次貴重な勞作を續刊されるといふ。併せて今後の活動を期待する次第である。(本文三七頁、圖版十八葉、東京地人書館發賣、定價四圓)(室賀)

H. G. Creel, *Studies in Early Chinese*

Culture, First Series, London, 1938.

上代支那文化の研究

日・G・クリール

先年「*Birth of China*」の一書を世に送つた著者にとつて此の書は支那滞在より歸國後の第二の發表である。Andersonsにより開始された支那新石器時代研究の分野に、我々は今一人の年輪まだ三十代の著者の登場を迎へることになつた。本書に見られる新しき資料の驅使と才氣ある理論の構成とは、著者の若さと共に我々に極めてアトラクティブなものを感じしめる。次に本書の内容を簡単に述べて見やう。

本論の初に先づ商代の史料に就いて述べ、その第一等史料が甲骨であり次いで、國立中央研究院による安陽發掘品が根本的なものであることを云ふ。本論の第二は夏王朝の存否に就いて致へそはあくまで傳説的ではあるが、夏、殷、周の所謂三代なるものが實に支那文化の基礎確立の時代であつたことは確かであると云ふ。かくて本論の第三は商民族の種、地理的、そして文化的問題が取扱はれる。人種は *Mongoloid men* に似た人種であつたらうと推し、地理的根據地はその傳説による都が主として河南北東部、河北南部、山東南西部に遷移してゐたことから推されるところ。最後に文化であるが商文化の起源は即ち支那文化起源の問題であると觀じて、主として考古學的資料によつて立論してゐる。

即ち後岡遺蹟の層序關係——最下層に仰韶期の彩陶がありその上層には全く遺物を包含しない間層を隔て、黑陶層が波ひ次で漸移層があつて商文化遺物包含層となる——より發展して新石器時代文化と商文化との關係の考察となる。著者は商文化は黑陶文化のプランチであると言ひ兩者に共通する四點——占卜のための獸骨の使用、版築法、馬・牛の遺骨の存在、白陶技術——を擧げて其の證としてゐる。而して黑陶文化は北東支那（河南、山東、河北南部）に地方的に特殊な發達を示した新石器時代文化であるとす。次に甬の分布を述べては仰韶期以前の文化期を代表するものとして齊家坪と丕召寨とを上げる。前者は即ち北西文化圏に屬するものであり、後者は即ち北東文化圏に屬する。前者が彩陶をもち乍ら甬を缺除してゐるに對して後者に於いては甬の發達した形式か

認められることより、甬は北東支那に起源をもち從つてその中心が北東支那にあることを云ふ。かくて甬の分布と黑陶の分布とは正に北東支那にその分布の中心を置くことにより一致する。甬は商文化に於いて完成される。商文化はあくまでも北東支那の地域と新石器時代の黑陶文化と密接な關係ありとしてそこに商文化の起源を求めてゐる。要するに商文化と云ふものは北東支那に分布の中心がある黑陶文化の基礎の上に青銅文化といふ新たな要素が融合したものに外ならないとする。換言すれば北東支那に榮えた黑陶文化から派生した商文化はその新たな要素たる青銅文化を異常に發達せしめたのである。かくて商文化の起源即ち支那文化の起源であるとして最後に其の總論として支那文化のユニークな性格はあらゆる他からの影響も常に支那文化と呼ばれる母體に同化したことにあると結んでゐる。

以上本書の内容を述べ終つたが我々は本書に盛られた常識的範圍内に於ける構想に極めてアトラクティブなものを感じる。これが米國人學者たるクリールの風格であらう。而して今日考古學的に支那上代文化の概念を得んとすれば、先づアンダーソン教授の *Children of Yellow Earth* と新進クリールの本書が双壁として擧げられるであらう。されど今日の我々の要望はこの二書の論述によつて充分満されるかと云へば、むしろ否と答へたい。クリールの本書はあくまでも從來の見解に立脚した構想である。その構想自體は極めてアトラクティブであるが、而も基礎となつた資料批判は今日の我々の要求を充すべくあまりに無批判であり、

正確な事實が段々と知られるにつけ我々はそれらの資料に對して懷疑的な段階に到達してゐる。例へば後岡に於ける層序關係、或ひは爾と黒陶との關係の如き本書に於いては何の懷疑もなく取扱はれてゐるが、今の我々に取つては其の資料の再批判が根本的な問題と考へられるのである。此の意味で支那文化の科學的研究にあつては先づ嚴密な資料批判がなされねばならぬ。それは極めて平凡なことであるが終始變らぬ根本的な鐵則であることを思ふのである。(Kegan Paul, Trench, Trubner & Co. (譯田正一))

數學史新論

原種行・清水英一共著

思ふに、數學と云ふ小學問は論理的な學であるが故に、明確な概念を必要とする。従つて、數學に用ひられる概念は抽象概念であり、反社會的術語とならざるを得ないものである。例へば、我々が微積分を學ぶ時に、いきなり變數とか、函數とか云ふ概念をつきつけられることがある。この場合、これを別の言葉で言ひ換れば、それは單に既成の論理的な形態に於て、演繹的なシステムとしての數學を教へ込まれるに他ならないことになる。斯うした數學は、この學の持つ抽象性と云ふ本質に於て、我々の理解を困難ならしめるものである。従つて、數學は必然的に一般の關心に乏しい結果を生じるのである。

そこで、従來の數學史は、この數學に興味を持たせる課題として提出されたのであつた。併し乍ら、従來の如き數學の學史とし

ての數學史を讀む時に、我々は果して數學に興味を持ち得るであらうか。斯くて我々は數學史が單なる數學の學史であつてはならないと結論せざるを得ないのである。

こゝに於て、我々は數學が人間の思想史に於て一般の思想と關係して、如何に大きな役割を演ずるかを考察する必要に迫られるのである。換言すれば、それは數學の人間生活に占めて居る地位の考察であり、數學史を動かす世界觀の檢討なのである。

因より、數學者と言つても數學の歴史の中に生れて、その世界の既存關係の中に新しい關係を見るのであつて、全然歴史を離れて其の人が一人で發見したものはない。従つて、發見とは、歴史の中に準備せられて居る所に於てなされるものである。

一般に發見と云ふものは、或る事柄が行詰つた時に、天才的直感に依つてなされるものである。併し乍ら、この發見に導かれる道程も隠されて居る道ではあるが、單なる直感のみの所産ではなくして、論理的な脈絡の上にあるものである。従つて、この直感も一般的に關係のある所に働くものである。この關係を具體的に言へば歴史と云ふことになる。換言すれば、如何なる天才人も社會的歴史的環境、即ち其の時代の世界觀に於て行動して居るのである。

例へば、ギリシア數學に於て比例論が重要視されるのは、ギリシアの世界觀の反映なのである。即ち、ギリシア人にとつてはギリシアの藝術作品の持つて居るフォームこそ眞實の姿なのであつた。換言すれば、彼等の論理的に把握し得るものは、靜的調和的